

深イ〜話!

No.17

～アサヒビール名誉顧問中条高德氏 致知「巻頭の言葉」より～

尊敬する平辰さん（株大庄社長）のお母さんが、天寿を全うされ、この世を去られた。そのときのあいさつをお伝えする。

「私たち兄弟は、佐渡に生まれ、島で育ち、18才の頃上京しました。亡くなった母は現代版『おしん』かもしれません。

母は、子供たちのおしめを古着の切れ端で縫い、汚れたおしめは、凍りつく川に運び、洗ってくれました。母のその手は、あかぎれで割れ、腫れ上がっていました。血の出てくる割れ口には、ご飯粒を詰めることで耐えていました。

食事をしながら、子供におっぱいを飲ませているときなど、下痢のうんちをし、抱っこしている母の腿が熱くなってくると、食事を中座して、そのおしめをはずし、下痢でただれたお尻を母は舌で舐め取っては吐き出し、吐き出しながらコタツで温めてあったおしめを取り換えるのでした。

今のように柔らかい紙はなく、紙といえば新聞紙くらいのもの。また、やわらかい布もなく、おしめも布を縫い合わせているので、それで拭けば赤ん坊のお尻は、さらに赤く腫れ上がってしまいます。母は「子供が痛かろう」と自分の舌で、その下痢のうんちを舐めて拭き取り、その口で再び食事を摂ることも度々ありました。（後略）」

誤解のないよう、特に若い母親に告げたい。

文明開化のいまの世に、このように非衛生的な育て方をしなさいと勧めるのでは決してない。こうまでして育てた母親の無償の愛。己（母親）を捨て、相手（子供）を立てる真実の愛を掴み取ってほしい。この真実の愛を理解した母親のみが、わが子が成長した日、「ならぬことはならぬ」と厳しく躰ができるという「陰陽の理」をしっかりと学んでいただきたい。